

1. 北上川と桃生町 【「わたしたちの桃生町」(平成4年3月31日発行)を抜粋】

1) 江戸時代の初め

昔の北上川は、堤防がなく自然のままに流れていたため幾筋にも分かれていました。大水が出ると、川の流れは変わり、田や畑は沼のようになり土や砂で埋まったりしました。このような川を改修して、洪水のない川にすることが、人々の大きな願いでした。

江戸時代の初め、伊達宗直という人が慶長13年(1608年)に相模土手を築き、中田町浅水のところで西に流れる川をとめて、今の川にしました。その後、登米の寺池堤防や柳津の黄牛堤防をつくりました。

2) 川村孫兵衛と北上川

伊達宗直の改修工事を引き継いだのが、川村孫兵衛という人です。孫兵衛は、仙台藩主伊達政宗にめしかかえられて、北上川の改修工事にたずさわりました。

この改修工事は、元和2年(1616年)に始まり、寛永3年(1626年)にかけて行われ、迫川や江合川を北上川と合わせて、河南町鹿又から石巻湾へと流す工事でした。

この改修工事により、川の流れが緩やかになり、米や木材などを運ぶ舟の交通が盛んになりました。石巻から岩手県の盛岡市まで舟が行き来でき、寺崎や神取に舟着き場がありました。大きな帆をはった船が、新田裏を走る姿は、とてもきれいだったそうです。

この工事で、今まで谷地になっていた広い土地を水田にすることができました。水田の用水は、津山町柳津の締切沼からと山田から引いていました。この川をそれぞれ古川と山田川といました。

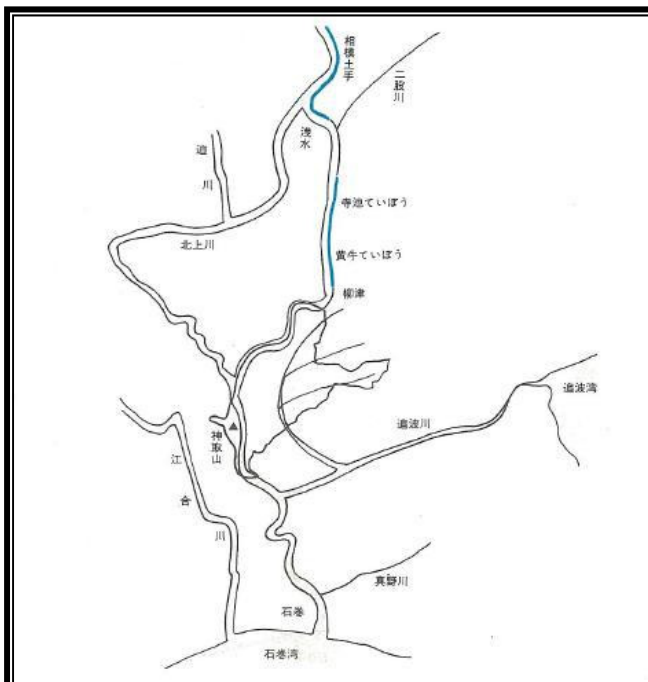
ところが古川は、北上川の水の高さと同じなので、大雨が降ると北上川の水が古川に入り、桃生町の水田は一面沼のようになりました。

また、北上川の堤防が崩れて、低い水田に流れ込み、田や畑は沼のようになり、土や砂で埋まったりしました。

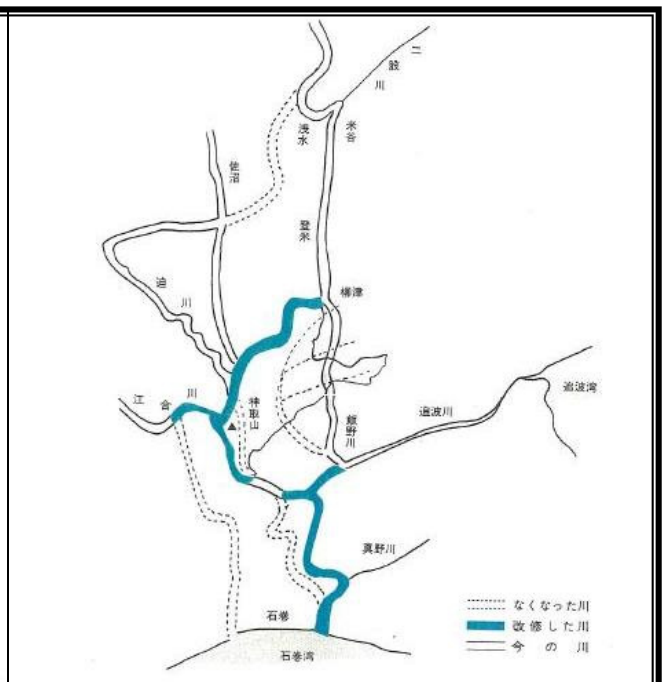


川村孫兵衛重吉の銅像

北上川の流れの移り変わり



川村孫兵衛の改修工事





現在の桃生町の水田の様子

3) 水害と新北上川

明治8年、脇谷の堤防が切れて、桃生町と河北町大谷地の水田や畑は泥海のようになり、米のまったく取れなかったところもありました。

明治も終わりに近い43年には、明治8年の時よりも大きな水害がありました。

この年の8月初めから10日間も降り続いた雨のため、倉塚の堤防が切れて、水田や畑は泥海のようになりました。この洪水で、中津山から南の地区では家の中まで水浸しになりました。水は4日ぐらいで引いたので、ほっとしていると、9月の初めにも、大雨が降り続き、水田はまた泥海のようになりました。

この2度にわたる洪水のため、ほとんどの水田から、米を取ることができませんでした。

このような水害をなくすため、明治44年、国の仕事として北上川の改修工事が行われました。

この改修は、津山町柳津から河北町飯野川まで新しい川を掘ることでした。「エキスカ」と呼ばれる機械で土を掘り、それを機関車で運んで、堤防を築いていきました。機関車は、石炭で動かされていました。石炭で動く機関車は、そのころとしては、大変珍しく、見物人もあったそうです。

「エキスカ」で掘れないところは人間が掘り、それを“モッコ”と呼ばれるもので運びました。

“モッコ”担ぎは2人1組で何度も運んでいると、肩が腫れて、働いている人にとっては、きつい仕事でした。

脇谷閘門をつくる時は、堰止めた水が流れてこないよう、夜も休まずに、工事を続けました。水が溜まったのは、ポンプで排水しました。ポンプは蒸気で動いていたので、夜中に火をつけておいて、仕事が始まる時に、すぐ使えるようにしておいたそうです。

女の人も、背中に箱を背負い、土を入れて運びました。雨が降ったりすると、なかなか仕事が進みませんでした。工事は、その頃としては、もっとも、新しい技術をもって行われましたが、完成には昭和9年までの23年間もかかる大工事となりました。

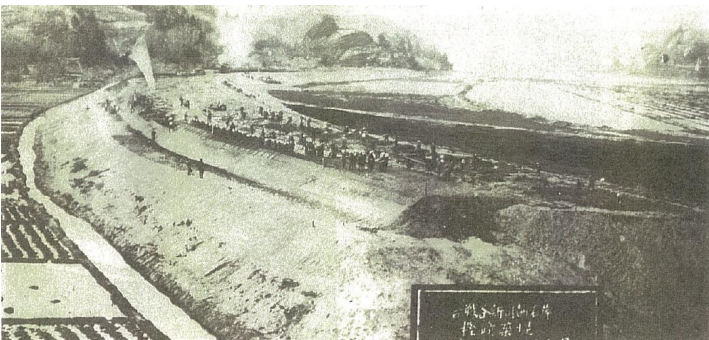
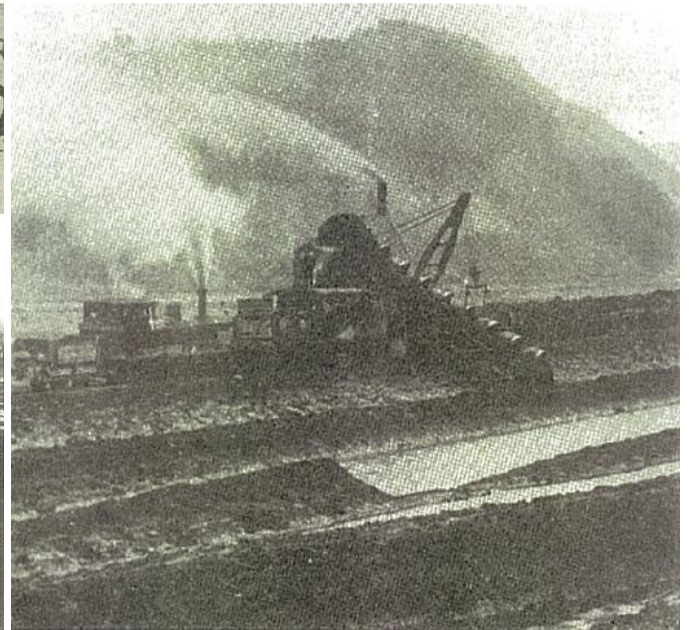
この工事の完成により、私たちの町は、農業用水の便が排水が良くなり、水害の心配がほとんどなくなりました。



明治 43 年の水害（河北町飯野川）



明治 43 年の水害（桃生町中津山）



檜崎堤防の工事（建設省北上川下流工事事務所提供）

エキスカ（建設省北上川下流工事事務所提供）



新北上川の様子（1995 年）